

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和5年4月25日（火）14:30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 記者会見室
- 対応：山中委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから4月25日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問をお願いいたします。質問のある方は手を挙げてください。

はい、タシマさん。

○記者 共同通信のタシマです。よろしくお願いいたします。

今日、委員長が定例会の最後におっしゃっていた 1F（福島第一原子力発電所）の、1号機のペDESTALの損傷についてお伺いいたします。委員長が早急にリスクの対応策など、東電さんと議論するようというお話がされていたと思うんですけども、委員長は現在、1F1号機のペDESTALについてどのようなリスクがあるとお考えでしょうか。

○山中委員長 今日私、お話ししたのは、安全上何かその 1F のペDESTALの損傷が、直ちに影響があるとは思っていないんですけども、やはりきちっと規制委員会と東京電力、この件について議論をしたほうがいいという判断で、あえて今日の最後に、規制庁側に、私のほうとしては技術会合を開いてはという意見を申し上げたんですけども、検討会のほうで検討事項を決めて、議論を進めていくという答えを得ましたので、早急にやっていただければそれでいいという。

何か安全上のリスクが今極めて大きいとは考えておりませんが、耐震性の問題ですとかというのは、評価をするとってはおりますけれども、かなり時間はかかりますので、今後のできる対応、あるいは懸念としてどういうことが考えられるのかというのはきちっと議論をして、結論として出しておくべきであろうというふうに思いましたので、そういう指示をさせていただきました。

○記者 会合でも今ほど、もう安全上の直ちに懸念はないということだったんですけども、そのように委員長が考えられる根拠は何でしょうか。

○山中委員長 必ずしも圧力容器を支えているのが台座だけではないということで、直ちに安全上の影響があるというふうには私自身は考えておりませんが、その点も含めて、きちっと意見交換をして、議論をして結論出してくれという、そういうお願いをしたところです。

○記者 具体的なリスクというのではないけれども、どんなことが想定されるかというのは双方アイデアを出し合って検討議論を進めてほしいということで。

ということで、今日、すみません。ちょっと今日、会合の議論を聞いていて、今日、これは規制庁のほうに何かを指示されたということなんですか。それとも東電のほうに求めるという意思表示だったんでしょうか。要は、今日の会合でどこに何を指示、もしくは求めたという形になるんでしょうか。

○山中委員長 昨日の事故調査の検討会では、ペDESTALの調査をきちっとしてほしいということは意向としては伝えさせていただきました。今日は規制庁側にきちっとそういう会合の中で、規制委員会と東電との意見交換をして、できる対応は何なのか、あるいは懸念事項として何があるのかというのをきちっと早く出してほしいという、そういうお願いをいたしました。恐らく耐震性の評価というのは、待っていてもかなり時間はかかるとお思いますので、それを待つ前に懸念事項あるいはできる対応を、結論を出していただきたいという、そういうお願いをしたところです。検討会で事項を決めて技術的に評価する必要があるれば技術会合を開いていただくという、そういうお答えだったので。杉山委員も同じお考えでしたし、スピード感についても、杉山委員も私も同じような考えだったと思います。

○記者 スピード感という言葉でしたけれども、いつぐらいまでにというような目処は何か考えていらっしゃるんでしょうか。

○山中委員長 特に次の会合でとか、あるいはその次の会合でという、具体的な時期的なイメージは持っておりませんが、そんなに遠くない、耐震性の評価を待つということではなくて、早めに議論を始めてほしいという、そういうことをお願いしたところです。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ヨシノさん。

○記者 すみません、テレビ朝日、ヨシノです。

同じ関連でなんですけども、もうペDESTALの開口部の鉄筋がむき出しになった状態を見たのはもう1年以上前でして、そのときから地元も含めて、早く耐震評価をしてくれという声はあったんですけども、何か、ダラダラとその調査が続いてここにきてしまって、やはり早くやるべきだった、東電としては早く調査を進めるべきだったのではないかと私は思うんですが、委員長はどのようにスピード感について思われるでしょうか。

○山中委員長 調査そのものもそうなんですけども、いわゆる具体的な対応策ですね。耐震性の評価ってかなりやはり、どういう損傷があって、どういう部位がなくなってというような、恐らくそういう評価をしようとしていたんでしょうけども、恐らくそれを待つてかなり時間がかかってしまったんだろうというふうに推測しますけれども、私、昨

日の事故調査の報告を受けて、やはり待つてはられないなということで、今日規制庁のほうにそういう指示をして、委員会できちっと今後の対応を結論づけるという、それも早急に結論づけるという、そういう指示をしたところです。

- 記者 本来であれば、それは東京電力が自ら進んでやるべきだったと思うんですけど、委員会が指示しないといけない、わざわざしないといけないことなんでしょうか。
- 山中委員長 恐らく、東京電力自身は大丈夫だろうというふうに考えて対応は遅くなっただろうと思いますけれども、その辺り、いわゆる内部の調査がある程度明らかになった時点で、私としてはもう待つてはられないなという、耐震性の評価も待つてはられないなということ判断いたしましたして、今日指示をしたところです。

- 司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。
- はい、エンドウさん。
- 記者 共同通信、エンドウです。
- 関連してですね、今のお話で待つてはられないという御発言がありましたが、改めてなんですけども、どういったところに焦りを感じているのかとかいうか、もっとスピーディーにやる必要がなぜあるのかとかいうところについて、もうちょっと詳しく御説明いただけませんか。
- 山中委員長 最初にもお話しいたしましたが、安全上何か懸念があるとは、重大な懸念があるとは思っておりませんが、東京電力の耐震評価をずっと待つていて、我々、待ちの姿勢でいるというのは、やはり規制委員会としては好ましくないと、私自身判断を昨日の時点でいたしまして、早急に何らかの対応をですね、本当に懸念事項がないのかも含めて対応をしてほしいという、そういう指示をしたところです。
- 記者 具体的には、耐震評価を急ぐよう求めるということではないですか。
- 山中委員長 耐震評価は恐らく時間かかるだろうと思いますし、何か急激に、今こういう状態だって分かったから、何か急に何か変化が起こるといふものだとは考えておりませんが、大きな地震が起きたときどう対応すべきなのか、あるいはそれに向けてどう対応しておくべきなのかという議論をきちっとすべきなのではないかという、そういう指示をしたつもりです。
- 記者 逆にそこに入れない、失礼な言い方かもしれませんが苛立ちがあるというところなんでしょうか。
- 山中委員長 1F 検討会でも恐らく、半年あるいは1年前ぐらいからこういう対応をしましょうという議論はされてきたと思うんですけども、もう少し明確なターゲットを絞ったような議論をしていただかないといけないかなというふうに思いましたし、田中委員も検討会のほう出席していただいておりますので、御了解はいただけるかなというふうに思っています。
- 記者 ありがとうございます。

○司会 ほかにいかがでしょうか。

はい、マサノさん。

○記者 フリーランス、マサノです。よろしくお願いします。

引き続き1Fの件なんですけれども、耐震性評価を既に外部の方がやっていたら、震度6弱で倒壊のおそれがあるという指摘をされていることはお耳に入っていますでしょうか。

○山中委員長 それは存じ上げていません。

○記者 それを指摘、東電に私のほうからしたのが今年の4月ぐらいだったんですけれども、そのときはまだ開口部の辺りしか分からない、内部の調査はこれからなのでそれを待ってから考えるということをおっしゃっていたんですが、実際に内部も全部、全損しているということが分かったので、今日の委員会の中で、規制庁のほうから、耐震評価を東電はすると言ったけれども、その前に具体的対応策等指示したというのは非常によかったと思うのですが、もっと具体的な指示が必要だと思うのですが、その点いかがでしょうか。

○山中委員長 具体的にというのは、こういうことをやりなさい、ああいうことをやりなさいという、恐らくそういうことだろうと思うんですけども、やはりそれも議論かなというふうに思います。特段、私自身、耐震評価が出ないでも、安全上今何か差し迫った危機があるとは思っておりませんが、対応できることはあるだろうというふうに思っておりますし、それは議論をきちっとしていただいて、いろんな方策があると思いますし、これまでも検討会の中では議論が出てきたと思います。その辺りきちっと明確にしてくださいというお願いです。技術的な評価をする必要があれば、技術会合を、新たに項目を考えて立ち上げてくださいという、そういうお願いをしました。

○記者 検討事項を検討するよというの、恐らく今おっしゃられたことだと思うんですけども、地元福島では使用済燃料がまだ残っているので、倒壊して、その壁を突き破って使用済燃料が落ちてきたらどうするかという点、それからシールドプラグが乗っかっていますから、尻餅をついたときにそれが一緒に落ちた場合、下にデブリがあって、そうなったときのリスクはどうなるかというような声、その場合避難計画が必要になるのかどうか、そういったことも検討事項には入ると考えてよろしいでしょうか。

○山中委員長 今おっしゃられたようなことは、直接私、今は懸念はしていませんけれども、当然格納容器にどういう影響があるかということは、当然推測をしないといけないうでしょうし、そういうような影響が出た場合に、どのように対処しておくべきなのかということは、技術的に検討しておく必要があるかと思っています。

○記者 一旦終わります。

○司会 ほかにいかがでしょうか。

はい、ヨシダさん。

○記者 すみません、毎日新聞のヨシダです。関連して質問させていただきます。

耐震評価よりも前に対策をとということ、検討すべきだということなんですけれども、耐震評価をする前にできる対策というのは具体的にはどういったことを想定されているのかって伺えますでしょうか。

○山中委員長 恐らく耐震評価を待っていると、本当に時間的にどンドンたってしまうばかりなので、万が一ペDESTALの支持機能が失われた場合にどういようなことが起きて、どういう事象が起きるのかということは、きちっと検討会の中で議論をしていただいて、技術的に評価をする必要があれば技術的に評価をしていただいて対応を考えると。

これまでも幾つか案は出てきていると思いますし、その必要が本当にあるのかどうかというところ、例えば内部の圧力のコントロールですとか、あるいは内部、当然、今、加圧した状態でモニタリングもしておりますけれども、そういったモニタリングの話ですとかというような、様々な今後の対応の仕方というのがあるかと思いますが、その辺り技術的にきちっと議論をしてほしいという、そういうお願いをしたところでございます。

○記者 内部の圧力のコントロールとか、そういうふうな、いわゆるハード的な、あるいはカバーをもう丸々作っちゃうとか、そこまでは必要ないというふうにお考えですか。

○山中委員長 恐らく、そういったところまではする必要は、今私自身は考えておりませんし、感じておりませんが、その技術的な検討をする中で支持機能を失われた場合に、どういうことが起きる可能性があるのかということはまず検討していただかないといけないことかなというふうに思っています。

○司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。

はい、オノザワさん。

○記者 東京新聞のオノザワです。

私も1号機の話なんですけれども、率直に言って委員長、東電の対応、今回の耐震に関する対応なんですけれども、これは遅いというふうに思われているんですか。

○山中委員長 恐らく耐震評価というのはかなり複雑な評価をしないと行けないので、時間がかかるだろうなというふうに想像はしております。その辺り、それを待っていたのでは、規制委員会としては役割を果たせないのではないかとということで、今日指示をしたところです。東電自身が耐震評価ということについて早くやってほしいと思いますけれども、難しい評価ではあるとは思っております。

○記者 つまり、その耐震評価は耐震評価でやるとして、先ほどの質問にもありましたけれども、本来だったら東電が支持機能を失った場合はこうするというのをもうちょっと早く、きちんと案として議論の台に乗せないと、規制委員会側も議論できないと思うんで

すけど、そういうオプションを用意してこなかったということについては、東電の対応をどう思われますか。

○山中委員長 やはり東京電力自身の対応というのは、去年に既にコンクリートの損傷が見られた時点から、そういう対応をしてほしかったというふうには思っています。

正直なところ、昨日の事故調査で、内部の損傷の度合いをきちっと見ることができ、ただこれ以上の調査というのはなかなか難しそう、耐震評価もなかなか難しそうということで、じゃあ何ができるんだということをきちっと検討していただくということが必要なというふうに思いましたので、私今日、そういう指示を出させていただきます。

○記者 すみません。関連してなんですけど、ペDESTALの昨日の検討会で委員長、ペDESTALの外がどうなのかというのをちょっと気にされていましたが、今のところ中は損傷しちゃっていて、どこまでいって外まで突き抜けちゃっているのかというのが、今の調査では分からないなという御認識ですかね。

○山中委員長 外はとにかくまだ分からない状態ですね。はい。

少なくとも、インナースカートという部分、いわゆるちょうど中心部分にあるようなあの部位が、一番その入り口に近いところは見えているというところまでは昨日分かりましたけど、その外側はどうですかというのは、なかなかまだ調査が進んでいないところで、そういった意味でペDESTALの支持機能ということについて、疑問だなというところですね。

○司会 ほかに御質問はいかがでしょうか。

ヤマノさん。

○記者 朝日新聞のヤマノと申します。

福島第一でちょっと別件なのですが、いわゆるSGTS（非常用ガス処理系）配管の撤去作業につきまして、今までも遅れているところがあったかと思うんですが、今回またSGTS配管の撤去で電源の問題とかで作業が中断したというようなことがございまして、この中断について大変遅れているところがあるかと思うんですが、どのように見ていらっしゃるのでしょうか。

○山中委員長 これはだから、現場に何度か昨年も調査に入らせていただいたときにもコメントさせていただきましたけども、あの程度の配管が切れないというのはもう本当に東京電力の現場力のなさかなと。もうそれをちゃんと培ってくださいというのは、社長にもお願いしたところで、もうそれに尽きると思います。

○記者 先日、いわゆるモックアップで現場の再現がうまくいなくて、干渉してしまって切れなかったというようなお話もあったんですけども、やっぱりそういった基本的なところでのその技術力の問題とか、そういった点について、やはり問題だというような御認識は持っていらっしゃいますでしょうか。

○山中委員長 これはもう東電の幹部、あるいは現場の作業される職員とも意見交換させていただきましたが、やはりそのきちとした現場力を鍛えてくださいという、そこに尽きるかなというふうに思います。単純な作業、もちろん放射線レベルが非常に高いという、作業環境は難しいというのはよく分かりますけれども、作業としては基本的な作業なので、そういったところがきちっとできるように、東電自身が現場力をつけていただきたいという、そこに尽きるかなというふうに思っています。

○記者 あそこが作業が進まないと燃料取出しですとか、ほかの作業にも支障が出る部分があると思うんですけども、やっぱりここまで時間がかかってしまうというのは想定というか、やはり意外な、そこまで技術力に問題があるというところというのは想定されていたところはあるのでしょうか。

○山中委員長 もう少し去年の段階で切り方、切断の方法とか、いろんな選択肢があったのかなと。恐らく切断するときのダストの問題とかをすごく気にされたんだろうと思うんですけども、恐らく切断方法の選択とか、様々な選択肢はあったらと思うんですけども、その辺り、今後もきちっと考えて作業を進めてほしいなというふうに思っています。

○司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。

はい、コガさん。

○記者 河北新報のコガと申します。

昨日の審査会合の件で伺いたいんですが、日本原燃の設工認申請の対応状況についてということが報告されましたが、その中でほかの電力会社の支援を受けるステアリングチームというのを作るということを御報告しましたが、これについてはどのように評価されていますでしょうか。

○山中委員長 審査の日本原燃の体制については、まだ報告、詳細に受けておりませんが、新しい体制できちっと審査に臨んでいただくということなので、これは直接社長にも審査に耐えるような資料をきちっと出してくださいと、これまでとは違う取組をしてくださいというお願いをさせていただきましたので、その一つの表れかなというふうに感じています。

○記者 会合の中で、そのプロパーの人材育成ができていないんじゃないかという懸念もありましたが、委員長としてはどのようにお考えになっていますでしょうか。

○山中委員長 少なくとも人材の問題ももちろんそうですけども、まずは、だから申請書をきちっと作り上げるためのマネジメントの体制、あるいはその全体の申請をチェックする能力の向上、その辺りをきちっとしてくださいと。まずは審査、それを進めるための活動をしてくださいというのが、審査に関するお願いをしたところです。

○司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。

はい、マエムラさん。

○記者 すみません、読売新聞のマエムラといいます。

今の関連も含めてなのですけど、4月に入って、また日本原電であるとか日本原燃の申請書のミスが相次いでいるというところで、あとは電力会社側が審査官側の要求に応じられずに審査が滞っているとか遅れている原発もあるので、そういう改めてなのですが、こういうミスとか電力会社の不備とかというのが続いている状況を委員長としては、今、どういうふうにお感じになっていますか。

○山中委員長 何か共通の要因があってというよりも、もう各社の問題、日本原電、それから日本原燃、各社の問題だろうと思います。これはだから、それぞれの社の問題だろうというふうに思います。

○記者 問題自体が相次いでここになって、この時期になって出てきているということ自体はどう考えですか。

○山中委員長 これはもうたまたま、各社抱えていた問題、それぞれの社が抱えていた問題、たまたま今の時期ということだろうと思います。

○記者 先ほども個別の背景があるだろうということをおっしゃっておられましたけれども、あえてお伺いしますけれども、例えばどういうことが背景としてあるのでしょうか。

○山中委員長 日本原電のほうですけども、これはもう本当に審査の根本の書類が作れていない、もうそこに尽きると思います。日本原燃のほうは、いわゆるその単純なミスが多い、あるいは情報共有ができていない、SG（保障措置）の問題とかを含めて、これはもう本当にそれぞれのマネジメント上の問題かなというふうに思います。それぞれ違う要因かなというふうに思っています。

○司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。

はい、ヒラタさん。

○記者 NHKのヒラタと申します。

標準応答スペクトルを考慮した地震動に係る審査で九州電力が期限となる1年を切った今もまだ続いている状況、委員長からも準備不足とか審査の遅れを指摘する声もありましたけれども、改めて1年を切った今現状をどうお考えでしょうか。

○山中委員長 今は審査、きちっと真摯に対応していただいているというふうには思いません。その後、その審査の進捗状況については、まだ報告を受けておりませんので、恐らく社長との対話をした段階からその審査に対しては真摯に取り組んでいただいているものというふうに考えております。川内と玄海では恐らく対応が違う対応を取られて対応していただいているというふうには聞いておりますけれども。

○記者 また、その審査に関しても、なかなか妥当性が示されるような地下構造モデルが示されなかったというのが主な原因かなと思うんですけども、そうなった背景をどう考えられていますでしょうか。

- 山中委員長 恐らくこの標準応答スペクトルというのが設定をされた段階で、問題になるのが九州電力自社であるというのは、認識はされていたと思うんですけども、もう最初に社長ともお話をさせていただいたときにコメントさせていただきましたけども、あくまでも準備不足、九州電力の準備不足なんじゃないかというふうに今も考えています。
- 記者 また、地元ではこの地下構造モデルを設定し直す段階で、基準地震動を低く評価しようとしているんじゃないかと指摘する声もありました。その辺りについてはどうお考えでしょうか。
- 山中委員長 その辺りについては、私自身はもう当初お話ししてきたように、問題に、このスペクトル自身が問題になるのは、九州電力自身の問題だというのは気づいていたはずなので、それに対するあくまでも準備不足が要因であろうというふうに思っています。
- 記者 その準備不足というのは具体的に、その九州電力の問題というのは具体的にどういふところの問題だとお考えですか。
- 山中委員長 恐らく、もう当初から地下構造モデルの変更ですとか、様々な工夫を当初からしておけば、締切りが近づいてなかなか間に合わないというような、こういう事態は招かなかつたのではないかなという認識不足、準備不足、あるいは予測が甘かつたというところもあろうかと思えますし、そういうところの対応の遅れが全ての原因だというふうに私は思っていますけど。
- 記者 ありがとうございます。また、川内原子力発電所では延長の審査も、今、同時並行で続いておまして、先日現地調査に来た杉山委員からは、審査自体は別問題と考えているとおっしゃられていましたけども、地元感情としては影響してくるのではないかという懸念もあります。この辺り、どうお考えでしょうか。
- 山中委員長 延長認可申請については杉山委員、きっちりと審査をしていただいていると思えますし、一部分、私もデータとか聞いているんですけども、特段何か大きな問題があるというふうには聞いておりませんし、杉山委員が現地視察に行かれたときの感想と同じような感じを持っております。
- 記者 また、これまでの例を見ても、延長審査が大体1年ぐらいで審査の結果が出るというのがこのを考えますと、応答スペクトルの期限を迎える前に審査の合格といたしますか結果が出るかなと思うんですけども、その辺りの影響というのはどうお考えでしょうか。
- 山中委員長 延長審査と応答スペクトルの問題というのは別に考えていただいたらいいかなというふうに思っています。延長審査は延長審査できちっとやらさせていただきます。
- 司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。
- では、ほかになければマサノさんで終わりにしたいと思います。よろしいでしょうか。

はい、マサノさん、お願いします。

○記者 フリーランス、マサノです。またお願いします。

3月22日に原子力規制委員会で議論した高浜4号の件に関してなのですが、電気接続部分についての議論があまりなかったもので、その点についてお尋ねします。

巨大プラントでは電気接続部が恐らく数百万か所あるそうなのですね。プラントの保全技術や制御設計などを30年間やってきた方によれば。そうしますと、そういったところだと、施工不良があった場合、程度の悪い施工不良は初期段階一、二年で顕在化するそうなのですが、バスタブカーブ理論というのがあって、その後、初期的に顕在化する問題が終わった後に、年数がたってくると故障が大きくなって施工不良と劣化が明らかになってくるということで、数百万か所の電気接続部に関しては、全部は当然見られないという御認識なのですが、委員長はこれについてどのようにお考えでしょうか。

○山中委員長 安全上重要な部分についてきちっと調べていくということは必要でしょうし、この点に対しての保全というのは事業者自ら定期事業者検査のときにしておりますし、我々もそういう確認を日常検査の中で行っております。

その部分についてはそういうお答えになるんですが、少なくとも原子力発電所の様々なトラブルがそのバスタブカーブを取るかという、これはIAEA（国際原子力機関）等の調査によると、そういうバスタブカーブは取らないという、これはもうメンテナンスをきっちりやっていきますので、そういう報告もございます。いわゆる通常、何か工業製品の場合に初期故障があって、年数がたつとまた故障が増えるという、いわゆるバスタブカーブを取るわけですが、原子力発電所の場合には、そういったカーブを取るという、そういう報告はございません。

○記者 それについては、後でまた、どこにそれが書いてあるか教えていただければと思いますが、次の質問ですが、今回のこの高浜原発4号については、ケーブルについては接続が切れてしまった要因と対策というのが明らかにされたんですけども、結局接続部については取り出して特定はできていないわけなのですが、これはやはり特定してほしいと委員長もおっしゃられましたが、まずそれを今すぐやるべきではないでしょうか。つまり、6種類の材料が今回接続されている部分で、容易に劣化が起きるような箇所じゃないかと思うのですが、その点はいかがでしょうか。

○山中委員長 これは3月のときの会見のときにもお話をさせていただいたと思うんですけども、電気ケーブルに異常な張力が働いて使用されるというのはもう考えられない状態です。これはだから、どういうふうな損傷が起きたかということについては、その部分について取り出すときにきちっと調べてくださいという、そういうお願いをいたしましたし、そのほかの部位についても、そういう劣化がないかどうかということについては調べるという電力会社の報告も受けておりますので、私はそれで十分かなというふうに考えています。

○記者 調べないことは非常に不自然だと思うんですけども、つまり、取り出してみれ

ば、取り出すとその部分が樹脂で覆われているので、今の問題が起きた状態のまま分解調査することは容易じゃないというのが理由なのですが、それは理由にならないと思うんですが、委員長はそれで理由になると思われませんか。

○山中委員長 その理由については理由にならないと思っています。ただ、取り出してきちっと検査はしてくださいと。取り出すことに意義があつて、調べることに意義がありますという、委員会でもそういうふうな発言をさせていただきましたし、杉山委員も同意見なので、樹脂に覆われているから取り出してその状態が保全できないので調べても意味がないという、そういうのは私は当たらないかなという、きちっと調べるべきだというふうに思っています。

○記者 おっしゃるとおりだと思うんですが、でも12月の定期検査のときでさえ取り出さないとおっしゃっています。これは委員長、理解できますか。

○山中委員長 これはもう取り出す時期に取り出していただいてきちっと調べていただければいいと。他の部位については、取り出してどういう損傷があるか、あるいはないのかということについては調べてもらえればそれでいいというふうに思っています。

○記者 問題が確かに起きた箇所を取り出すことに意義があるのであって、ほかの場所を取り出して調べるというのはおかしくないでしょうか。

○山中委員長 ほかの場所を調べることの意義も当然あるかと思えます。

○記者 最後にしますが、関西電力に聞いたところ、もう1か月がたっていますけれども、将来的に、その該当部分を取り外すタイミングで分解調査ができないかを検討しておりますということで、分解調査をしますとも答えていらっしゃるんですね。これについてはどうお考えでしょうか。

○山中委員長 これはきちっと検討するんだろうと思っています。

○記者 指示は出されませんか。

○山中委員長 特にその部分に、いつ、どういう検査をなささいという指示は今のところ出すつもりはありません。

○記者 特定することによって何か不都合があるんだろうかと、ちょっと勘ぐってしまうんですけれども、要するに、これが劣化が起きていた、劣化の評価の仕方も開発されているそうで、そのハンダづけだ、何だというのは。そうすると、これが劣化が起きていたと分かれば、今の運転期間を削除するという法案とは不整合が起きてしまう。

○山中委員長 それは全く関係ないです。高経年化だとは思っていません。

○記者 でも、それは特定されていないということで了解。

○山中委員長 施工不良であるというふうに考えております。高経年化だとは考えておりません。

○記者 施工不良は否定しませんけれども、経年劣化が起きているかもしれないという可能性もあるとはお思いにならないですか。

○山中委員長 考えていません。

○司会 ほかに御質問、いかがでしょうか。

それでは本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

—了—